

『五感』呼び起こす農業

リポーター 小畠 公 悅 (上四羽出)

第2回

米価の実質的な引き下げや後継者の不足など、農業を活性化していく上で解決すべき課題が山積しています。また、食べ物に対する消費者の関心が高まり、安物を安く供給していくことが求められています。こうした中、消費者に見える農業を活性化していくことが求められています。

た。青年部の活動と農業の将来について青年部長の小畠守さんに伺いました。

マ交流会はいつから?

「人と食と農との出会い」をテーマに今年で三年目です。去

年までは新鮮な野菜を販売するだけでしたが、今回は、消費者と生産者の距離をもっと縮めたいということで、タマネギの収穫

今日は、消費者とのタマネギ収穫交流会を開催したJA大館市青年部を通してこれらの農業について取材しました。小畠リポーター、福祉バンク大館の取材から在宅福祉サービスについて考えた瓜田リポーター、お二人のリポートをご紹介します。

を体験してもらいました。

▽盛況だったようですね。

有機栽培や低農薬野菜といっ

た安全性の高い食料が求められ

が見える農畜産物」という点で

消費者に安心感をもつてもらえたと思います。また、大館も都

市化が進み、農作業を手伝う機

会が減りましたし、野菜はどう育つかを知らない子供も増えてきていますから、交流会を通して自然への認識を深めてもらえたと思っています。

▽農業の将来は?

農業は、お金に換算できない

農業は、お金を減らさない

ボランティアとの出会い

リポーター 瓜田 輝子 (獅子ヶ森)

くらい環境保護にも大きく役立っています。農業は人々が生きていく上で最も重要な産業です。国連は先日、世界人口は今後も増え続ける、と発表しました。食料は、もつともっと必要になります。今は苦しくても次代のために誇りを持って農業を守り育てていかなければなりません。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

交流会に参加した家族が楽しく作業をしている姿を見て、私は自分が忘れていている「五感」を呼び起こしてくれる素晴らしさを感じました。

もうとりある農業を目指しています。こうと決意を新たにしています。小畠部長は「次回も楽しみにしてください」と語っていました。代人が忘れかけている「五感」を呼び起こしてくれる素晴らしい農業を多くの人に体験してもらいたいと思いました。

土のぬくもりに触れ、大地の香りを胸いっぱいに吸い、自然の音に耳を傾ける……現



右が瓜田リポーター



左が小畠リポーター

住民参加型の在宅福祉サービスとはどんなものだろうかと考え「福祉バンク大館」を取材しました。

福祉バンク大館は、働く婦人の家で開かれた老人介護講座の受講生が中心となって「学んだことを広く社会に役立てていこう」と、昭和六十二年六月に発足しました。

会員は、サービスを受ける利用会員、ヘルパーの役割を担う協力会員、賛助会員に分かれています。このうち協力会員は九十八人ですが、平均年齢は五十九歳と高齢化が進んでおり、若い人の参加が望まれています。サービスの主な内容は①食事

代筆や朗読などで、原則として一回二時間程度になっています。利用会員には、前もって利用券二点百円券の三十枚づり)を購入してもらい、サービスの内容に応じてその券を使つてもら

うシステムになっています。協力会員は、時間に余裕のある時に業務に携わっているそうですが、さまざまな行事にも参加しています。二十四時間チャリティー募金、デイサービスセ

ンターでの奉仕活動、特別養護老人ホームへの慰問、車椅子協力会員、研修旅行や婦人会館まつり、市社会福祉大会への参加などを通じて、対外的な交流を深めています。

現在の悩みは、利用会員が少

ないことです。潜在的な利用希望者はかなりいると思われるのですが、親せきや近所に気兼ねして頼みにくいことや、介護はぎりぎりまで家族の力でするという意識が高いことなどが、利用申し込みの少ない理由のようです。高齢化が急速に進む今日、在宅福祉サービスへの需要はますます高まっていくものと思いま

す。その需要にこたえていくには、福祉バンク大館など住民参加型の福祉団体の活動を充実することが不可欠です。官民が一体となって進めていくことはもちろん、私たち一人ひとりが行動し、その力を結集していくことで、「生活先進国・日本」が実現すると思います。

なお、「興味のある人は、市総合福祉センター内の福祉バンク大館(☎49-3860)へ気軽に問い合わせください」とい